

7、短命の首相と平和・安定した社会 (137 ページ)

2011年10月現在まで、日本の首相が走馬灯のように更迭され、5年間のうち6人の政治家が相前後して首相の座を射止めては去っていく。

しかし、今日晴れ風無しでも明日は嵐のような日本の政局と比べれば、ここまで半世紀近くの間、日本社会はかなり穏やかかつ安定している。それは日本国の政治体制及び社会構造と密接にかかわっている。

日本の各政党間抗争は単なる権力争いであり、相手の芝居を早く終了させてわが陣営の早期登場の繰り返しにすぎず、政権の座についてから国民の財産所有権の変更やクーデターか政治運動で天地異変を起こすような土壌と環境が存在しないため、大きな社会的な動乱が起きにくい。

50年代と60年代に、社会党・共産党など左翼団体の長期にわたる闘争の結果、社会主義諸国で唱える平等の理念が資本主義日本に導入され、社会の隅々に根を下ろされた。労働団体の繰り広げる毎年春闘のおかげで、経済の高度成長期の労働者賃金が経済成長の伸び率とほとんど並行して上げられた。物価が24.4%も上昇した1974年の翌年、労働組合の奮戦により賃上げ率を32.9%まで引き上げるのに成功した。

わりあい合理的な税率、長期間続いてきた市場経済システム、及び比較的清廉潔白な官僚管理体制により、公務員コースを通じて短期間で一攫千金を実現することは夢の中の夢。その結果、貧富の差がさほど小さくなく、いま多少ゆるんではいるものの、まだ8割以上の国民が「一億国民総中流」意識にしがみついている。

各政党は、相手側議員の経済問題、汚職ないしスキャンダルを、四六時中鵜の目鷹の目で探し回っている。

(一部省略)

こうした透き通った競争システムにより、政党間毎日のように繰り広げられるあらゆる捜しのなかで、政治家たちは、いつになれば摘み出されるかと気を付けながら、やむを得ず襟を正して小心翼翼で行動している。

激しい政争と混乱した政治のおかげで、社会と世の中に対する不信が除去され、割合安定した社会が築き上げられた。

(一部省略)

国会では新任首相のわずか数十万円の資金管理問題について質疑と回答に数時間も喧々囂々が続く。明日になると、また大臣の誰かが一言の失言でまだ温めていない大臣の椅子から滑り落ちてしまう。そして執行猶予の再考もできない。

(一部省略)

日本の現行政治体制の制約により、鶴の一声で決断できる強い首相が期待できないかわりに、調和のとれた安定した社会基盤が構築され、「地震・津波・放射線に襲われても、落ち着き払う」大和民族が生まれた。これは畏敬の念を禁じ得ないところだ。